

(論文)

ギャップイヤーの意義 ー実践者が認識するギャップイヤー経験ー

赤 崎 美 砂

キーワード

ギャップイヤー 海外渡航 グローバル人材 学び 教育の機能

1. はじめに

CiNii（国立情報学研究所による学術情報サービス）の論文データベースには「ギャップイヤー」に関わる16件の論文があり、そのうち12件が大学教育に関わるものである。入試制度や国際交流プログラムの改革の議論の中でギャップイヤーが検討されているのだ（国立情報学研究所、2015）。入試制度については、欧米と日本の大学入学時期の半年のズレを否定的に捉えるのではなく、この入学時期ギャップを利用して学生を海外で研修させ、グローバル人材に必要な英語力や異文化対応力を育成することを目指す入試制度改革が東京大学を中心に検討されてきた（斉藤、2013）。このような事情で日本ではギャップイヤーは高等教育に組み込まれた形で語られることが多い。

そもそもギャップイヤーとは何か。イギリスで大学合格者が大学の許可を得て入学時期を1年間延期し、教育制度や家庭から離れた形で多様な活動を行なうことがギャップイヤーの典型で（砂田、2012）、旅、ボランティア活動、就労体験、留学等が行われる。資金調達の為のアルバイトもこの期間中に行なわれ、単一の活動ではなく複数の活動を組み合わせることが多い。大学はギャップイヤー経験者の学習動機の高さ、主体性、退学率の低さ等を肯定的に捉え入学延期を許可するが、大学の制度としてギャップイヤーが行なわれるわけではなく、あくまでも学生個人が計画・実践する慣習である¹。入学時に限らず在学中あるいは卒業と就職の間に実施する例を含めるとイギリスでは2割の大学生がギャップイヤーを実施するといわれている。（青木：2009，小山他：2004，斉藤：2013）

この慣行は地域的、年齢的な広がりを見せ、イギリス以外の欧米・オセアニア出身者、あるいは社会人もギャップイヤーを実施している。これらの広がりを含めて捉えると、ギャップイヤーは人生の一時期に典型的ライフステージから逸脱し非日常空間で何らかの活動をすることで、海外渡航を伴うことが多い事象である。

ギャップイヤーには、グランドツアーと修行という2つの起源があるといわれ、どちらも欧州で行なわれていた旅を伴う学びの伝統である。グランドツアーは、イギリスの貴族や富裕層の子弟が

あかざき みさ：淑徳大学 国際コミュニケーション学部 教授、成人教育学博士

家庭教師を伴い当時の欧州先進国を周遊するもので、教育が社会制度化される以前に行なわれていた家庭での教育の仕上げと、大人になる通過儀礼という機能があった（小山他，2004）。一方、修行の旅は若い職人が徒弟として各地を渡り歩く伝統である（岡本，2001）。現代イギリスでのギャップイヤーは、地球市民教育プログラムを起源として始まったが（青木，ibid.）、ギャップイヤーの社会的認知度の向上に伴う目的と活動の多様化や商業化、ボランティア活動の形骸化等の変化により、地球市民教育は後景化している。

日本でのギャップイヤーに関わる議論には、大学の制度として実行することが前提とされていること（文部科学省，2014等）、政府や企業がグローバル人材育成の手段と捉えていること（中津，2013）の2点の特徴があり、個人の慣行として捉えられているイギリスの状況とは異なっている。

2. 学び

2.1. 海外渡航と学び

海外渡航には、レクリエーションとしての旅、駐在・派遣・就業経験等の業務、語学研修・留学等の教育等、多様な形があるが、いずれにしても出国・移動・目的地での滞在・帰国という一連の過程の中で、国内に留まっていたは得ることができない経験をするというのが予測されるという点が共通している。

留学の成果については地平の拡大、言語・文化・ビジネス理解の深化（OECD，2014：342）や異文化対応力、積極性・行動力、目的達成力、問題解決力、政治・社会問題への関心、外交・国際問題への興味、平和に対する意識、地球的課題に対する意識（小林，2015）等があげられている。

2.2. 学びと教育

学ぶこととは変わることである。クラントン（1999）は「学習とは、経験によってもたらされる思考、価値観、態度の持続的な変化である」としている。その学びをもたらし場や過程が教育であるとする、その機能には個人の成長、知識の洗練、労働者としての能力向上、市民（社会構成者）としての能力の育成という4側面があるといわれている（Bartlett&Burton，2012）。

2.3. 学びと教育・学びの背景：現代社会

現代社会には多くの特徴があるが、学びや教育と関わりが深いのはグローバル化、知識社会化、変化の速さであろう。グローバル化と教育の関係については、グローバル人材育成推進会議（2011：3）によれば、「我が国経済が新たな成長軌道へと再浮上するためには、創造的で活力のある若い世代の育成が急務である。とりわけ、グローバル化が加速する21世紀の世界経済の中にあっては…国際的に活躍できる『グローバル人材』を我が国で継続的に育てていかなければならない。」とされている。

2 また知識の蓄積と情報操作による知的・経済的価値の形成が社会の営みの中核となる知識社会（小林，2001）も、社会変化のスピードの加速に伴う転職の常態化とともに、継続的な能力向上プレッシャーを生み出している。

これらの社会的状況がグローバル人材育成の必要性を喧伝する官民一体の動きを活性化し、人々の生活に影響を与えている。グローバル人材とは、語学力・コミュニケーション能力、主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティーを併せ持つ個人である（グローバル人材育成推進会議，2011）とされているが、曖昧かつ、ハードルが高く、有効性が疑われる概念として批判を受けている面もある。

例えば廣瀬（2010）は、グローバル人材は主体的市民性が基盤となるはずであるが、主体的市民性とは何か、それをどのように培うべきかという議論がなされていないと指摘している。彼は、民主主義社会での市民たる条件である主体性の特徴に、他者尊重、批判的思考、異質性・多様性への寛容、自己責任等を挙げ、主体性は生得的ではなく教育によって身につくものであるとしている。

また、コミュニケーション能力ということばの意味が共有されていないことを課題とする意見もある。他者に寄り添い正確に他者を理解する能力、社会のしくみを知る能力、表現力、社会的相互作用における結果を生み出す能力等で構成される「社会的知性」が育成目標能力として認識されるべきという主張である（西村、2012）。

2.4. ギャップイヤーに注目する意義

海外渡航のうち、旅行、留学、駐在については学問上の研究、および企業活動のための資料の蓄積があるが、ギャップイヤーについては上記のCiNiiの検索件数が示すように研究の蓄積が少ない。日本でのギャップイヤーの認知度が低いことが先行研究の少なさに表れていると思われる。また、留学、駐在、国家間就労協定のような一定の制度を背景とした事象であれば実施母体が明確であり、実施母体を通じて調査協力者にコンタクトすることが可能だが、実践者自身が企画する旅・修学・就労の3要素を含む複合目的の海外渡航であるギャップイヤーは、研究のための調査協力者を得ることが難しいことが研究の蓄積を妨げている可能性もある。

研究の蓄積が少ないギャップイヤー経験を「学び」の視点で分析し、留学とギャップイヤーの学びの質および教育的意義の違いを明らかにすることによって、海外渡航の一類型としてのギャップイヤーの現代日本社会での意義を検討することができる。また今回のギャップイヤーに関わる知見が、研究の蓄積が少ない渡航事象、たとえば出稼ぎや国家間就労協定の課題推測にも活用できることも期待できるだろう。

3. 研究方法

本研究の目的は、ギャップイヤー実践者のギャップイヤー経験に対する認識のありかたを明らかにすることで、このような研究は個人が自分の経験をどのように解釈しているのかを理解する質的研究に属す。自然現象と異なり、人間を対象とした研究では、研究者が調査協力者の世界を客観的に説明することが困難であることを認識することが重要である。本研究も前記の認識を共有し、研究者と調査協力者の対話によって調査協力者の世界を理解するという解釈学的立場をとる（波平・道信、2005）。研究の過程は、個人と周囲の世界との相互作用に注目して分析を進めるマイクロエスノグラフィの原則に則って進められた（箕浦、1999）。

質的研究では調査協力者の視点にたつて事象を理解するために、事象の背景、場面、状況、その他の事象の関係性等の文脈を明らかにすることを重視する（波平・道信、2005）。今回実施した半構造化インタビューでも、ギャップイヤー中の行為とそれに対する調査協力者の解釈とともに、ギャップイヤーに至る経緯、周囲の人々との関係、ギャップイヤー一般に対する認識、将来のビジョ
3
ンや計画について話を聞いた。インタビューは録音し、音声を書き起してデータとし、概念ごとにラベルをつけ、それらをカテゴリー化しさらに構造化する手順で研究が進められた。

調査協力者は4名の出身国が異なるギャップイヤー実践者で、10代後半から20代後半の男女それぞれ2名ずつである。出身国は日本、イギリス、カナダ、ドイツの4カ国である。

インタビューの実施にあたっては、調査協力者にとって快適な環境を確保することを心がけ、調査協力者と筆者が相談し、自宅、勤務先の静かな部屋、喫茶店、庭園でインタビューが実施された。

調査の趣旨を説明し、調査への協力の意思確認と録音の許可を得てから、原則として調査協力者の母語で実施された。ドイツ出身の調査協力者については、筆者がドイツ語を解さないため、調査協力者と筆者の共通言語のうち、調査協力者が自分を表現するのに快適であると選択した言語である英語を用いてインタビューを実施した。調査協力者のプロフィールを以下に示す。

表1 調査協力者プロフィール

	A	B	C	D
出身国	イギリス	日本	カナダ	ドイツ
性別	女性	女性	男性	男性
年齢	10代後半	20代後半	20代後半	20代後半
渡航前の職業	高校生	会社員	会社員	大学生
渡航先	オーストラリア、 ベトナム、タイ	アメリカ	日本	日本
渡航先での行動	アルバイト、旅行	有期雇用	雇用	修学、アルバイト
調査時期	終了後	終了後	実践中	実践中

4. 結果

この項では、まず個人別にインタビューで聞き取った内容を示し、次にインタビュー全体に対する分析結果を示す。

4.1. 個人別の結果

以下にインタビュー実施時期の順に4名それぞれが語った内容の概略を述べる。

① 調査協力者Aさん

Aさんはイギリス出身の10代後半の女性で、大学入試機能を兼ねた高校卒業試験（Aレベル）の後、入学を許可された大学への入学を1年間延期した。彼女は高校卒業と大学進学のための1年間という、イギリスで典型的なギャップイヤーの実践者である。帰国後、大学進学直前にインタビューが行なわれた。

ギャップイヤー期間中には、まずオーストラリアでアルバイトをして資金を調達し、その後ベトナムとタイを旅した。Aさんは情報収集や全体の計画を主体的に進めると同時に、他者の力も活用している。出身高校の同級生をギャップイヤーの同行者にして自分自身の精神的負担を軽減するとともに、親を説得する材料とし、オーストラリアとタイでは親戚や親の知人に事前の情報収集や滞在先提供の面で力を借り、知人がいないベトナムの旅は斡旋業者を通じて予約した。

ギャップイヤーは、いつ知ようになったかを覚えていないほどAさんや周囲の同世代の友人の間では一般的な事象である。彼女にとってギャップイヤーは、念願のオーストラリアへの長期滞在と自立願望を実現する機会であった。家族の中で一番若く、早生まれでクラスでも最年少であることが多く、常に自分自身を子どもっぽく感じていたAさんは、大学進学にふさわしい心理的成長ができていないと感じていた。また、小学校から続いた試験のうち最大の関門であったAレベル試験のための受験勉強後のブレイクという意識もあった。ギャップイヤーでよくみられるボランティア活動については、大学進学後に経験したいとのことであった。

上記のようにギャップイヤーのイギリスでの社会的認知は高いようだが、彼女の高校の同学年でギャップイヤーを実際に行なったのは2名のみで、社会的認知に比べ実施率は高いわけではない。ギャップイヤーの潜在的希望者は少なくないのだが、出身高校の進学熱、父母の過保護や子どもへ

の信頼の欠如等の大人の態度が高校卒業者のギャップイヤー実施を躊躇させているのではないかとAさんは考えている。また、短期の旅行、ボランティア等、学生が参加可能な学校外の活動の選択肢の多さもギャップイヤー実施の障壁として挙げられた。

ギャップイヤーでは肯定的経験も否定的な経験もあった。オーストラリアでのアルバイト先での勤労姿勢への高い評価、現地社会についての新しい知識の獲得、国籍を超えた友情の形成、ギャップイヤーを実践する年齢が若者に限らず多様であると気づくなど、事前の知識と経験の違いを学んだこと等、肯定的経験が語られた。同時に、健康不安や新たな同行者たちとの対立、旅程変更を余儀なくされる等、否定的な経験も話された。

Aさんは、肯定・否定両面の経験によって自分が成長し自立度が高まったことを実感していた。親の心理的・経済的庇護のもとを離れ、不慣れな土地で新しく出会った人々と折り合いをつけながら過ごし、無事に帰国できたことで、夢見がちであった自分が現実的になったと述べていた。つまりギャップイヤーが心理的な自立をもたらすと当初の期待は、ある程度充足されたのである。ギャップイヤーによって快適な環境から抜け出る経験をもっと多くの人がすべきだとAさんは主張していた。

一方で、ギャップイヤーのあり方や質については個人によって異なると捉えている。ドラッグやアルコールを伴って大騒ぎする等、自国でできることをギャップイヤーの名目でわざわざ海外で行なう人が多いことを彼女は憂いていた。

ギャップイヤー期間中に既に入学が許可されたものとは別の大学に応募して入学を許され、Aさんが実際に入学したのは後から応募した大学である。ギャップイヤーの社会的評価について彼女が具体的に述べることはなかったが、ギャップイヤー期間中の大学再応募の事実、ギャップイヤーが大学入試に不利になると彼女が考えていなかったことを示唆しているだろう。

② 調査協力者Bさん

Bさんは、大卒就職後3年半で退職しギャップイヤーを実施した、日本出身の20代後半の女性である。名の知られた企業での終身雇用の職を離れ、アメリカで1年間、給与と宿舍が提供されるインターンシップを行い、旅行を経て帰国した。彼女は出発前から1年後に必ず帰国し日本で再就職すると決めていた。このアメリカでのインターンシップは、世界的に有名な企業が応募から採用まで緻密な書類整備と面接を課す競争率が高いもので、Bさんはその全ての過程を他者の力を借りることなく一人で行った。情報はwebを通じて収集した。ギャップイヤーのタイプとしては、母国での2つの雇用の間の1年間に限定し母国で次の仕事に就くことを前提とする、社会人のギャップイヤーである。インタビューは帰国後の再就職が決まった時点で実施された。

大学在学中に1年間英語圏に留学し、語学研修のみならず学部授業にも参加し英語力を養った。今回は学業ではなく、海外で与えられた役割を遂行する就業体験を希望してインターンシップをすることを決め、さらに日本人であることを活かすことができる当該のインターンシップを選択した。学業では味わえないやりがいの実感を得たい気持ちがあったという。

現地で経験した、自分の変化する部分と変化しない部分、相反する認識のバランスをとることを学んだことを成果として認識していた。現地の職場では国籍別に業務が分担されていたが、宿舍は国籍混合であった。素早く状況を判断する能力の向上、日本人同僚との友人関係の形成等、他者が見てもわかる変化とともに、自分自身の気づきや認識の変化が成果として挙げられた。就労経験や収入等インターン参加動機の違い、職業選択にあたり常識や思い込みにとらわれていた自分、留学時よりも深化した日本や日本人に対する客観的認識、集団生活の中で国籍別イメージの形成が進むのと同時に、国籍差よりも個人差が大きいことを認識するという一見相反する認識の形成等、多く

の認知的変化がインタビューの中で語られた。変化ばかりでなく変わらない経験もしている。渡航前に期待していた自分の性格の変化は1年では実感できなかったことは期待はずれであったということだ。

Aさんとは異なり、Bさんはギャップイヤーについて誰でも成功するわけではない点を強調していた。職業等の経験を積む目的で海外渡航する場合には、強い目的意識をもつことが必要で、期待はずれのこと起きるときに対処できる力もギャップイヤーを成功させるために重要だと考えていた。

③ 調査協力者Cさん

カナダ出身で20代後半の男性Cさんは、大学卒業後4年半の間母国で会社員として働いていたが、仕事がルーチン化していて、自分の持つ業務遂行能力やリーダーシップを発揮できず、昇進も望めない状態に行き詰まりを感じ続けていた。自立と新しいキャリア探索のために前職を辞し来日し、英語学校の講師として働いている。帰国するか否か、あるいは帰国する場合の時期も現段階では決めていない。Cさんのケースは、高校から大学への間のギャップイヤーではなく、社会人のギャップイヤーである。来日後6ヶ月が経過した時点でインタビューが行なわれた。

渡航先に日本を選択したのは言語と文化に慣れているからである。Cさんは日本以外の外国への渡航歴がない一方、日本には交換留学とワーキングホリデー¹¹でそれぞれ9ヶ月滞在したことがある。

Cさんも渡航準備のためにWebを活用した。仕事と住居は来日前にインターネットを通じて情報収集、応募、手配を行った。来日後も母国の友人と週1回、メールでコンタクトを続け、両親とは週に1-2回web電話をしている。普段手紙は書かないが、来日後に親の誕生日にカードを送ってみて、紙媒体の方が心情に訴える力があって良いと再認識した。また、IT技術が外国滞在者の生活の質を変えたのではないかと考えている。

日本に来て働くうちに自己肯定感が高まった。語学教師として受講生の個別ニーズを正確に把握し適切に対応するうちに、受講生から肯定的フィードバックを得ることが多くなり、対人業務の側面でも有効感を得ることができているからだとして自己分析している。また、受講者の成長を見る喜びを実感することから達成感も得ている。職業的肯定感と並んで、生活上も家族の心理的・経済的サポートからの自立を実感できるようになったことにも満足感を覚えている。

現在日本で彼が住んでいる地域の人たちとの関係は快適である。外国にいる気がしないのと同時に、興味をかき立てられる人との出会いがあり、包摂感と違いを楽しむことのバランスがとれているからである。「違う」ということについて、それを受け入れ楽しむというスタンスをとっている。町の中で見知らぬ人が不意に近づいてきていきなり英語で話しかけられることが時々あり、多少不愉快に感じるが、その他の違いについては母国と違っているだけと思えば気にならない。却って自分の想像を超えるような経験をしている人々との出会いが多く、それを面白いと思っている。

英語学校の講師として順調に仕事を進めているとはいえ、語学講師をキャリアにするつもりはなく、現在までのところ生涯キャリアは見つけるに至っておらず、道半ばという意識を持っている。また、帰国するか否か、また帰国する場合の時期も現段階では決めていない。この将来のキャリアと居場所のビジョンの不明確さゆえに、Cさんは自分のケースについて典型的なギャップイヤーとはいえないのではないかと考えている。次にどこでなにをするか明確なビジョンをもっていないということは「ふたつのライフステージの間の活動」というギャップイヤーの定義の前提である「戻る位置」が不明だからだ。

④ 調査協力者Dさん

ドイツ出身の男性で20代後半のDさんは、日本語専攻の大学生である。卒業を目前に交換留学中で、インタビューは来日して1年近く経過し帰国を控えた時点で行なわれた。帰国後は遅滞なく卒業し、再び来日することを希望している。

彼が在籍するドイツの大学では、交換留学は通常2年次に行うものだが、彼は卒業年度末期に留学した。通常は卒業して就職する時期だが、それを遅らせて来日したのである。制度上1年後の帰国が想定されているとはいえ、実質的には、学業と就職の間のギャップイヤーである。

Dさんは子どもの頃からアニメを通じて日本文化に触れていたが、高校生のときにインパクトが特に強いアニメに出会ったために日本に対する興味が強くなり、市民講座を利用して日本語を学び始め、ドイツ国内の2つの大学で日本語を専攻した。第1の大学で日本語が思うように修得できず、自習に集中するために休学したが学習は進まなかったため、退学して2年間就労した。働き始めた当初は勉強から離れ働くことや人々との交流を楽しんだが、長時間労働による健康被害の懸念が生まれ、また当時の仕事が一生涯のキャリアとは思えず、別の大学に入学しなおし、再び日本語を専攻した。第2の大学では第1の大学での知識や技能の蓄積に加え、交友関係を最小限に絞り勉学に集中したため、良好な成績で卒業に向け順調に進級することができた。また、在学中にドイツで出会った日本人とともに日本に2ヶ月滞在したこともある。

優秀な成績をおさめることができた大学での日本語学習であったが、日本語を実際に使う場があまりなかったため、日本語を使うことができる環境に身をおく方法のうち最も費用がかからない手段として交換留学制度を利用した。しかし、来日後に予想とは異なる事態が続き、インタビュー時点では大学は居場所ではなくなっていた。

留学中の大学には留学生向けに彼が得意な英語による講義も用意されていたが、彼は日本人学生と同じ講義を受けることを希望し、日本語で行なわれる講義を履修していた。これらの講義の予習復習にかなりのエネルギーを割いていたところ、重要な人間関係が崩壊し鬱状態になり、学習意欲が急速に低下して予習復習が滞り、日本語での講義が理解しきれない状態に陥ってしまった。また、就職を常に意識して好成績をキープし就活に勤しむという、日本人学生の典型的な行動パターンは、Bさんの視点から見ると学生の本来あるべき姿ではなく、彼らとの交友関係を築く気が起きなくなった。これらの事情で大学から足が遠のくようになり、アルバイト中心の生活を送るようになっていたのである。

日本でのアルバイトは居住地にある宿泊施設の受付で、宿泊者とのコミュニケーションがあるだけでなく、経営者や同僚を含んだ地域住民との関わりが強くなっていた。居住地は来日前にドイツで複数の友人の推薦があった、東京23区内の住宅地に隣接した商店街を選んだ。リベラルな住人が多いところが故国の住環境と似ている上、地域の人々が彼を外国人ではなく仲間としてみてくると感じ、快適だと感じていた。特に、地域コミュニティの為に奔走するある人物を尊敬するようになった。Dさんはもともと人々の生活に興味をもっていて、1箇所に長く滞在してはじめて人々の生活がわかるようになるのだから、海外へ渡航するのであれば旅よりも長期滞在を選びたいという。

彼は、学校制度や親の庇護といった快適な環境から出て、知り合いのいない場に身をおくことにギャップイヤーの意味があると考えている。この点ではドイツでの2つの大学の間の就労期間が自分にとって第1のギャップイヤーであったと思っている。この期間に、お金や家族の有り難さを実感し、自分がしたいこととしたいくないことが明確化するという形でビジョン形成の契機を得る機会であった。キャリアビジョン形成については、高校卒業の時点で将来を見通して大学の専攻を選択するのは難しく、一度社会に出てから大学に進学するのも良いのではないかとBさんは考えている。

ギャップイヤーの社会的評価について尋ねたところ、ドイツでは大学生が半年から1年休学するのは極めて珍しいわけではないが、企業は休学期間の成果の質を採用時の評価基準にするとの見解を示した。

Dさんの帰国後のキャリアビジョンはまだ明確ではない。第2の大学入学のころから日本語ある

いは日本関係の分野での研究職に就くことを目指していたが、留学中に前述のうつ状態に陥って以来、そのビジョンが消失してしまい、ビジョンの形成は今後の課題として残っている。留学先大学の学生気質に対する批判的コメントにもみられたように、彼には卒業後“サラリーマン”になりたくないという気持ちがある。卒業後できるだけ早くワーキングホリデイ制度を使って日本に戻り、起業を目指すのが現在の計画だが、これも変更の可能性がある、企業に勤める可能性があることは自覚している。

4. 2. インタビュー全体

この項では、前項で示した個別のインタビュー結果を統合することによって見出されたカテゴリーを、個人別テーマと調査協力者間に共通の経験とに分けて述べる。質的研究ではカテゴリー化(データのグループ分け、ラベル付け、関係付け)が研究者によって行なわれるため、調査結果と考察を完全に分離することは困難であるといわれている。この項ではデータのカテゴリー化を筆者が行なっていることを自覚しつつ、それぞれのカテゴリー内の情報については、調査協力者が述べた内容を可能な限り客観的に報告する。

① 個人別テーマ

ここではまず、各人各様のギャップイヤーに対する個人別の焦点の当て方の違いについて述べる。調査協力者それぞれが話をするとき、彼らが特に注目する点については話される時間的長さが他の点より長く、繰り返し述べられている。Aさんは自立、Bさんは能力形成、Cさんは自立とキャリア形成、Dさんは渡航目的の変化と地域コミュニティ参加がテーマとなっていた。

Aさんの語りのテーマは自立であった。人間として成熟することを目的として挙げ、ギャップイヤーを通じて自分が成長し、親の庇護から自立できたことを成果として述べており、目的通りの成果を得たギャップイヤーである。

Bさんが主に述べていたのは、海外での職業経験による就業能力の向上であった。状況判断力に加え、日本社会の客観視の深化、自他の理解の深化、異文化の境界線の際立ちのしくみへの気づき等、異文化理解の認知面の能力が向上したことを自覚しており、Aさんと同様に事前の目的に合致した成果を得て帰国した。

Cさんは、自立とキャリア形成について語ることが多かった。親からの自立と前職の不満を解消するためのキャリア探索を求めて来日し、業務を順調に進め自己肯定感が形成されているが、もともと目的が探索的であるため、目的合致かどうかは問えない。

Dさんは、日本語を使用することによる能力(日本語力)の向上という来日目的は達しているが、その手段であった留学という形式上の目的は変化し、地域コミュニティ参加について盛んに語っていた。

② 共通の経験

各人各様の意味をもつギャップイヤーであるが、調査協力者間に共通するギャップイヤーの機能もある。

a 成長

典型的ライフステージから一時的に離れたプロセスの中での自己の成長を語るという点は、どの調査協力者にも共通していた。就労、在学、旅、現地での生活の過程で、対立や葛藤といった否定的な経験とともに、母国では味わうことのできない肯定的な経験を積んでいる。出身国との物理的距離の確保による親からの自立、既存の親密な友人関係の不在による新しい対人関係の形成といった私的な側面の変化に加え、外国人顧客のニーズ分析やニーズ対応、母語が使えない状況での状況

判断能力等、働くために必要な能力向上の実感も述べられた。

b 想定外のできごとへの対処

ギャップイヤー中には予想外の出来事や予定変更が起こることが多い。Aさんはイギリス人以外に友人ができることは思っていなかったがギャップイヤー中に外国人の友人を得、健康上の懸念が発生し旅程が変わり、大学での専攻を再考し進学先も変えた。Bさんは異国で仕事をするというかなりインパクトがあるはずの生活の中でも自分の性格が変わらないことに驚きを感じていた。Dさんは滞在の目的が変わっている。もともと、学んだ日本語を使うための手段としての留学であったとはいえ、思いがけない出来事がきっかけとなり、大学に通わず居住地のコミュニティでの就労と人々との交流にほとんど全ての時間を費やすようになっていた。

c ブレイク

緊張からの開放や次の段階のための心理的エネルギーの蓄積等、ある種のブレイクの効果もギャップイヤーにはあるようだ。Aさんはギャップイヤーの目的のひとつに学業からの休みを挙げ、CさんとDさんはひとところに数ヶ月以上留まって暮らす時間が長くなり、地元コミュニティとの関わりが度合いが高まっていた。

d 海外渡航への慣れ

出身国、年齢、出発前の職業など背景が異なる調査協力者たちであるが、ギャップイヤーを実行する背景に海外渡航に対する慣れがあることは共通している。今回の調査協力者は、ギャップイヤーの社会的認知度が高い社会で生まれ育つ、あるいは事前に旅・留学・ワーキングホリデイといった形で渡航経験がある人たちであった。

e インターネットの活用

調査協力者たちは事前の情報収集や仕事やツアーへの応募をインターネットを通じて行い、ギャップイヤー中もメールやインターネット電話を活用しており、webが情報源や通信の手段として盛んに活用されていることも共通している。

5. 考察

この項では研究の目的に沿って、ギャップイヤー実践者のギャップイヤー経験に対する認識のありかたと、留学とギャップイヤーの相違点を明らかにするために、調査結果と先行研究を対比しながら整理し、「学び」の視点でギャップイヤーの意義を検討する。

5.1. ギャップイヤー実践のパターン

ギャップイヤーの形は様々である。今回の調査では、目的先行の計画的ギャップイヤーと、海外渡航の当初の目的や計画が変わり結果としてギャップイヤーになるパターンが見出された。また、当初の目的と成果が合致しているパターンも、目的と実践にずれが見られるものも、通常の生活を離れることが目的で成果を想定しないものもあった。ギャップイヤー後の見通しにも異なるパターンがあり、地理的・社会的な意味で戻る場を想定しているケースと、それを想定していないケースがあった。ギャップイヤーのミニマムの定義を「通常の生活を離れ、海外渡航して何らかの活動をする」としてみると、今回の調査では、そこに何らかの学びや成長が認められることは共通しているが、ギャップイヤーという事象のありかたは多様で柔軟に変化するものであった。結果の項で述べたように、ギャップイヤーは途中で想定外のことが起こり、ギャップイヤーそのものが計画になかった形に変化することもあった。このような不確実な状況に対処するには心理的な回復力が要求されるだろう。

5.2. 能力向上とギャップイヤーによって得られる自己肯定感

いずれの調査協力者のインタビューでも、個人の成長が語られた。ギャップイヤーを実践するためには、事前の情報収集、交通や宿舎や仕事の手配等、主体性が問われる。親からの自立、言語能力、異文化対応力、対人コミュニケーション能力、業務遂行能力、困難の克服と回復力等、様々な能力の向上とそれに伴う自己肯定感が語られた。

調査協力者は10代後半から20代後半の年齢でいずれも成人初期にあたり、人生の中でも特に将来のビジョンを形成するため、職業面と心理面の能力を向上させ、自己を確立させることが課題となる時期にある。また、日本でいうグローバル人材養成の喧伝と同様に、先進各国でも労働市場における自分の価値の向上は個人にとって喫緊の課題である。人材としての能力向上や自己肯定感の獲得は彼らの世代的課題を表しているとともに、社会的要請を反映していると解釈できる。ギャップイヤーで培われる能力について実践者が直接述べたものと分析の結果わかったものを整理すると下記ようになる。

- A 経験対応力：自立、主体性、柔軟性、回復力
- B コミュニケーション力：外国語、対人関係形成・維持・発展
- C 就労観：就労経験→就労の現実感、就労の解釈の変化、社会のしくみの理解
- D 社会性：コミュニティ参加、異文化能力（母国の相対視、寛容性、開放性）

5.3. 市民性涵養の課題

個人の能力向上に対して強い興味を示される一方、個人と社会的課題の関係については文化差以外の点で語られることはなかった。廣瀬（2013）のいう市民性のなかで、「他者尊重、異質性・多様性への寛容、自己責任」は、今回の調査の中で異文化状況での他者との距離の取り方や、親からの自立という形で現れたが、いずれも過去の親との関係や眼前で展開する対人関係に関わる認識について語られているのであり、社会的正義、人権といった、直接目にする範囲を超えた少し大きなレベルでの、批判的思考を要求する社会的課題については関心が示されていない。個人と社会の関係に対する関心の形成は、他者からの働きかけや、社会的課題を自ら経験することなどがなければなかなか関心が向きにくい時期であるのかもしれない。また、個人の能力向上を喧伝する社会的状況において、市民性には目が向きにくいと解釈することもできるだろう。第2次大戦後ギャップイヤーが始まった時点ではプログラムの目的であった地球市民育成が、現在では前面に出てくることが少ないイギリスの事情と共通している。

5.4. ギャップイヤーの柔軟性

ギャップイヤーは制度でなく主体的に実施する行動であるため、実施年齢、目的、渡航先、期間、活動等に制約が少ない。人生のどの時期でも、各自が適切だと思った時期に、学位等の物理的な成果をもたらさなくとも、単にライフステージの一休みといったブレイクの形でも行なえる。渡航先も先進国に限らず、アルバイト、旅、インターシップ、ボランティア活動、語学研修等、複数の活動を組み合わせることが可能である。

また、時間の使い方を実践者が調整できるため、納得がいくまで特定の事柄に時間を使うことができ、自らの経験に対する省察や他者の観察をする時間的・心理的余裕を持つことができ、腑に落ちるという形の学びが起きる土壤があると考えられる。ギャップイヤーの柔軟性と時間的、心理的余裕は、クライトンのいう、「経験によってもたらされる思考、価値観、態度の持続的な変化」

という学びが起きる土壌を提供していると考えることができる。

5.5. ギャップイヤーの成果の社会的認知

ギャップイヤーが普及している国では、概ね肯定的な社会的評価がある。先行研究でも雇用者の肯定的評価や大学がギャップイヤー経験者の主体性や学習動機の高さを評価していることが述べられているが、今回の調査でも、Aさんのケースではギャップイヤー後により入学が難しい大学への進学が実現している。ただし、近年、大学や企業がギャップイヤーの大衆化に伴う質の変化に対応し、ギャップイヤーに対する評価を厳正化しつつあることは先行研究でも今回の調査のDさんのケースでも明らかになっている。

一方、ギャップイヤー概念がまだ十分に普及していない日本において、Bさんはギャップイヤー経験を生かした就職をしているわけではない。これは日本でのギャップイヤーの社会的認知の低さを表していると考えられるだろう。今後、ギャップイヤーそのものや、ギャップイヤー入試の宣伝を通じて、経験者数が増加することにより社会的認知が進むだろう。

欧米でのギャップイヤーに対する評価の厳正化と日本での社会的認知の向上の必要性を鑑みると、今後はNPO団体等による評価・証明書発行制度や大学等の関係者の推薦書発行等の方策等、ギャップイヤーの質保証を考える必要もあるだろう。

5.6. 留学とギャップイヤーの相違点

この項では上記5.1. から5.5. で述べた内容を活用してギャップイヤーを留学と比較し、留学とは異なるギャップイヤーの特徴を明らかにする。

① 渡航先の選択肢の広さ

まずギャップイヤーは渡航先が留学よりも限定されにくく、選択肢の中が広い。留学は発展途上国から先進国へ、あるいは先進国から先進国へという人の流れで、いずれにしても行き先は先進国であることが多い。一方、ギャップイヤーの渡航先は先進国に限定されることがなく、国際交流の視点で見ると、人の流れの双方向性がより高い。

② 制約の少なさ

留学は学位や資格取得という明確な目的のもと、知識と技能の向上を図るため、多少の旅や経験が伴うにしても、渡航先では勉学に集中することになる。一方、ギャップイヤーは大学や企業のような組織の外で実践される部分が多いため、目的や活動が多様で組み合わせ可能であり、途中での計画変更の可能性もある。また、渡航先での時間的制約も少ない。

③ 経験の質

教育の役割は、個人の成長、知識の洗練、労働者としての能力向上、市民（社会構成者）としての能力の育成であった（Bartlett & Burton, 2012）。もちろん留学ではこれらの成果を得ることができることは疑いないが、ギャップイヤーでは主体性、回復力、納得に至る学び、社会性という点で留学に勝る学びが起きる可能性がある。

教育機関が提供する制度やサポートの中で行われる留学に比べ、ギャップイヤーは企画の段階から実践者が主体的に動かなければ実現しない。また、制度の外にあるため予測できない事態が起こる可能性も高く、心理的回復力が涵養される機会になるだろう。時間的制約の少ないギャップイヤーでは自分の経験について時間をかけ幾度も省察する機会をもつことが可能であるため各自が納得するような理解の枠組みの変化が起きることもあり、留学よりも認知面で深い学びにつながる可能性がある。

6. おわりに

グローバル化、知識社会化、変化の速さが顕著な現代社会では、個人の職業遂行能力の向上の必要性が喧伝されている。その是非は脇におくとして、ギャップイヤーが海外渡航を伴う学びの機会としてどのような可能性を持っているか考えてみると、ギャップイヤーは制度外という特性によって、主体性や心理的回復力の涵養という面でグローバル人材能力の向上につながる可能性がある。また、実施時期や目的、活動内容も柔軟に設定でき、生涯学び続ける機会になるであろうし、見方を変えれば、流動性が高まる現代の雇用状況の中で息抜きあるいは方向転換を図るステップとしても機能すると考えることもできる。さらに、渡航先も先進国に限定されず、草の根国際交流の双方向性の向上にも寄与する可能性がある。つまり、ギャップイヤーは現代社会の諸要求にこたえる可能性があるのではないだろうか。

また、今後の海外渡航を伴う学びの場として、留学と並ぶ選択肢になる可能性がある。国際交流に関する先進国共通の悩みは、留学に出かける自国学生の少なさである。世界の留学生数は増加しているのだが (OECD, 2014)、それは発展途上国から先進国に向かう一方的な流れを示すもので、先進国間の留学交流は政策的後押しがあってやっと成り立っている状態である。今後、発展途上国が先進国化し、国内の高等教育の発達による留学の相対的魅力の低下により留学に出かける学生が減少することがあれば、学びを伴う海外渡航の手段として柔軟性の高いギャップイヤーの形式に注目が集まる可能性も考えられる。

参考文献

- 青木辰司 (2009) 「動き出したギャップイヤー：新たな社会貢献型教育制度を目指して」『改革者』政策研究フォーラム 593, 50 (12), 48-51
- OECD (2014) 『OECD Education at a glance 2014』OECD 経済協力開発機構
- 岡本伸之 (編) (2001) 『観光学入門』有斐閣
- クラントン・パトリシア (入江直子, 豊田千代子, 三輪健二: 訳) (1999) 『おとなの学びを拓く：自己決定と意識変容をめざして』鳳書房
- 国立情報学研究所『CiNii Articles』アクセス日：2015年8月11日
- 小林明 (2015) 「留学体験のインパクトと経年変化—社会人としての留学体験評価 (2)」『留学交流』独立行政法人日本学生支援機構 2015年8月号 (53), 1-10.
- 小林信一 (2001) 「知識社会の大学—教育・研究・組織の変容 (特集 大学・知識・市場)」『高等教育研究』4, 19-45
- 小山悦司・赤木恒夫・江村恭子・王曉彦 (2004) 「大学初年次教育における学外活動の試み：英国のギャップイヤーを手がかりとして」中国四国教育学会教育学研究紀要 50 (1), 130-135
- 斉藤剛史 (2013) 「ギャップイヤー 制度ではなく慣習：認識の違い浮上—日英シンポジウム」『内外教育』6172, 10-11, 2012.6.15.
- 12 Bartlett S. and Burton D. (2012) Introduction to Education Studies. Sage
- 砂田薫 (2012) 「ギャップイヤー導入による国際競争力を持つ人材の育成」『留学交流』(12), pp.1-12
- 中津将樹 (2013) 「ギャップイヤー入試：どのようにギャップイヤーと入学試験を結びつけるか」『大学入試研究ジャーナル』(23), 165-170
- 波平恵美子・道信良子 (2005) 『質的研究 Step by Step：すぐれた論文作成をめざして』医学書院
- 西村直樹 (2012) 「海外留学と社会的知性の育成」『留学交流』(12), pp.1-5

廣瀬武志（2010）「グローバル人材と海外留学をつなぐもの：〈主体性〉再考」『留学交流』26（5），pp.1-18

箕浦康子編（1999）『フィールドワークの技法と実際—マイクロ・エスノグラフィー入門』ミネルヴァ書房

グローバル人材育成推進会議（2011）『グローバル人材育成推進会議中間まとめ』http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/san_gaku_kyodo/sanko1-1.pdf アクセス日：2015年8月31日

注

- i ギャップイヤーは個人的な慣行として行なわれることが多いが、近年イギリスでも大学と外部団体が連携してギャップイヤープログラムの開発を行う例も出てきている。
- ii 一定の年齢の以下の国民を対象に相互に期間限定の就労ビザを提供しあう2国間協定。

（受理 平成27年9月2日）